

2017年 夏号

第98号

僧伽編集委員会

〒921-8031
金沢市野町2丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241-5219
題字 本多 千翠

もし衆生ありて仏に帰すれば、
かの人、千億の魔に畏れず。

『教行信証』化身土巻(末)

『教行信証』
親鸞聖人の主著。この一
文は『日蔵経』巻第九「念
仏三昧品」からの引用。

イ 僧 イ 伽



右の写真は学生の頃、パキスタンの市場で写したものです。同じイスラム教圏でも、この国に来る前に立ち寄ったトルコやイランとは違う、粗削りな感じの雰囲気心地よかったことを今でも覚えています。かつて、この国の北部はガンダーラと呼ばれ、東西文化の交流地と

終わらせる勇氣

徳法寺杉谷 淨

して栄えました。インドがヒンズー教圏とイスラム教圏に分かれ、パキスタンとして歩み始めたのは戦後のことです。私を感じたのは新しく国を作り上げようとするエネルギーだったのかもしれませんが。近年、この国で有名になった少女がいました。ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんです。

女子校を経営していた父の影響で、タリバーンの女性差別を訴えていた彼女が二〇一二年に暗殺されたことはご存知の通りです。これ以降も、この国では、二〇一四年には学校が襲撃され、子供一三二人を含む一四一人が死亡、二〇一五年にはバス襲撃テロ事件で四十三人が死亡、二〇一六年には大学襲撃テロ事件で二十五人が死亡、病院が爆破され六九人が死亡、公園で自爆テロがあり七十人以上が死亡しています。これに対して、パキスタン政府はアメリカと協力して大規模なタリバーン掃討作戦を展開し、沈静化に向かっていますが、一部のタリバーン勢

力がイスラム国と合流しさらなるテロを画策しているようです。

この様な状況で、マララさんは「タリバーンに復讐したいとは思いません。私はタリバーンの息子や娘たちに教育を受けさせてあげたいのです」と語り、ノーベル授賞式で「なぜ「強い」といわれる国々は、戦争を生み出す力がとてもあるのに、平和をもたらすことにかけては弱いのでしょうか。なぜ、銃を与えることはとても簡単なのに、本を与えることはとても難しいのでしょうか。なぜ戦争をつくることはとても簡単で、学校を建てることはとても難しいのでしょうか」と、訴えています。仏教でも、憎しみや恐れはより大きな悲しみを生み出すと説いています。マララさんの講演最後の言葉は「女の子が幼いうちに強制的に結婚させられることも、戦争で子供の命が失われることも、子供が学校に通えないことも、これら終わりにしましょう」でした。終わらせる勇氣は互いを思いやる心から生まれるのでしょうか。

石川教雄



ミティラー美術館を訪ねて

旅の魅力は予期せぬ出会いとそこから様々な興味、関心呼び起こすところにあります。先日、久しぶりに新潟県・十日町市に行きました。今回の話は、今から二十五年前、インドで買った一枚の絵に始まるのです。

昼食のために立ち寄ったパトナという街のホテルで、私達の前に現れた、何枚もの絵を抱えた男。その絵を生んだミティラー地方では、三千年前から、母より娘へという形で、独特な絵の技法が伝えられているのです。元々は土壁や床に描かれた

もので、そこに表現されている日常の営みは、彼女らの日々折々の心の有様そのものです。これらの絵は『ミティラー画』と呼ばれ、ピカソにも影響を与えたと言われています。

男の手によって私の前に並べられたそれらの絵は、すべて手描きの作品で、一つとして同じものはなく、素朴ではあるものの個性的なものばかりでした。

その時に添乗員から新潟県・十日町市で、この絵を愛し、美術館を作った人がいることを聞きました。前衛音楽グループ『タージ・

マハール旅行団』所属の長谷川時夫氏です。彼は新たな音作りのために、試行錯誤の末、仏教音楽を交えた東洋的な音楽制作に取り組んでいました。四十五年前、東京から十日町市に転居した彼は、廃校の小学校を借り受け、この地に『ミティラー美術館』を開館したのです。インドから帰ってきた知人が持参した『ミティラー画』がきっかけでした。

私は過去に二度訪ねているのですが、その時、インドからこの美術館で『ミティラー画』を実演制作するために来日していた姉妹に会いました。彼女達は『ミティラー画』を描く意味を、

「月が来ると花は笑う。月は寒い時や雨季にも澄み切っていて、月を見ると心が幸福になる。何か問題があったとしても、心が晴れ、それを忘れてしまう。」

と、月に託して語っていました。また、長谷川時夫氏は『ミティラー画』を、

明治開国以来、急速に経済大国を築いていく中で、切り捨て失ってきたものを豊かに持っている。」と評しています。

私達の日常を振り返ってみると、早さや効率に追われ、先を急ぐあまり、心の存在さえ忘れてしまうように思えます。そしてそのことが、視野を狭くしてしまうのです。一度立ち止まって、何を見過ごしてきたのか、見つめ直す時間が必要なのではないでしょうか。

尚、二〇〇四(平成十六)年の中部地震により、この美術館は大きな損害を受け、一時、閉鎖を余儀なくされ

ましたが、今は無事に再開することができています。これも長谷川時夫氏の想像を絶する努力の賜物です。『伝えていく』ことの大切さを学ばせて頂いた旅となりました。

プロフィール(略歴)

いしかわ のりお

一九五四年(昭和二十九年)

十月二十一日

富山市生まれ

龍谷大学文学部卒。

伝道院(布教使課程)修了。

富山市水橋館町四八五

浄土真宗本願寺派永順寺住職

富山教区西別院『ともしび』

編集委員



カルプリー・デーヴィー「チャクバ」

真宗人物伝

第四十三回

徳法寺 杉谷 浄

八田の入信房

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第十八番である八田の入信房です。

八田の入信房を開基とする仏名山玉川院常福寺（茨城県つくば市大曾根）が伝えるところによると、八田の入信房の俗姓は八田七郎知朝とされています。八田氏は常陸の豪族である宇都宮氏の祖、宇都宮朝綱の子、八田宗綱によって起こされています。宇都宮氏は熱心な浄土教信仰で知られており、朝綱は益子に阿弥陀堂を建立、子である頼綱は後に法然上人に弟子入りしています。傍流である八田氏も同様に浄土教信仰を持っていたようで、宗綱の子である知家は常陸に関東にお

ける浄土信仰の中心である善光寺の分寺を建立し、新善光寺殿と呼ばれていました。これ以降、八田氏は善光寺に対する強い信仰心を代々受け継いでいたようです。

親鸞聖人も、関東に入られる時、善光寺に立ち寄られ、善行寺聖（みよ）となられたと伝えられています。善行寺聖とは、善光寺からご本尊である阿弥陀如来を賜り、各地でこれをご開帳して講組織を作り、寄進を集める僧侶のことです。妻子を連れて関東にいられた親鸞聖人にとって、善行寺聖であることが大切な生活の糧となっていたと思われます。これが事実であるとするならば、常陸の国に入られた親鸞聖人が、この地域での

善光寺信仰の代表的な存在であった八田氏のもとに行ったのも頷けます。

ところが、寺が伝えているところによると、この頃、稲田草庵にお住まいであった親鸞聖人が八田氏の所領を訪れたのは、この地にある太子堂を参詣するためであったとされています。太子堂とは聖徳太子を祀るお堂です。当時、日本に仏教を弘められた聖徳太子に対する信仰（太子信仰）は全国に広がっていました。親鸞聖人も、聖徳太子を日本のお釈迦様として尊敬し、多くの和讃を残しています。

仏教に帰依していた八田氏の所領に太子堂があることは不思議ではありませんし、ここを親鸞聖人が参詣することも不思議ではありません。ただし、寺伝には善光寺のことが触れられていないのです。初期の親鸞聖人を伝える絵伝には大きく善光寺が描かれています。本願寺が伝える絵伝には善光寺が描かれていませ

『サンガ茶話会』
毎月第一木曜日
午後三時～五時
東別院真宗会館内
囲炉裏の間
お茶とお菓子をいただきながら、お坊さんと気楽にお話できる空間です。相談というほどではないにしろ、ちょっとした聞いてみたい、いろんな人と話してみたいという方大歓迎です。もちろん無料です。お気軽にご参加ください。

本願寺の意図はどうであれ、善光寺が親鸞聖人と八田氏の入信房を結び付けた可能性は大きいと思います。親鸞聖人が京都に帰られた後、八田の入信房はその後を追って京都に向かいましたが、途中病に倒れ尾張の運善寺で亡くなられてしまいました。今でも運善寺には入信房の木像が安置されています。



善光寺式阿弥陀三尊像
（一光三尊阿弥陀如来像）

真宗豆知識

おつくう (億劫)

なんとなくやる気がしない、というときに使う「おつくう」ですが、漢字で書くと「億劫」となります。「億」は「一億年」という時の「おく」で十の八乗のことです。「劫」は時間を表す単位で「一億年」という時の「年」にあたります。ですから「億劫」とは時間の長さを表す言葉で、本来は「おくこう」と呼ぶのですが、促音化して「おつくう」となったのです。

「年」は地球が太陽の周りを一周する間の時間です。「劫」がどのぐらいの時間の長さを表すのかは、以前にも『僧伽』の中で紹介しましたが、もう一度おさらいします。

「劫」はインドで考えられた時間単位で、厳密な定義は無かったようです。ヒンズー教では、教義が整理さ

れる中で、四十三億二千万年と決められました。これはヒンズー教の最高神であるブラフマーの一日の長さです。ブラフマーの一年は三百六十日で百年の寿命を持つています。ブラフマーの一生が宇宙の一生です。ですから宇宙の寿命は、七万二千劫、すなわち三十一兆四百億年になります。

仏教では具体的な時間の長さは決められる事無く、世界が生まれて無くなり、次の世界が生まれるまでの時間を四劫としました。ですから「億劫」は二千五百万回世界が生まれ変わる間ということになります。

ただ、これではあまりにも漠然としているため、経典には様々な例えとして「劫」の長さを説明しています。有名なものとしては次の様なものがあります。

一辺が二キロメートルの岩を、百年に一度柔らかな布で撫で、この岩がすり減って完全になくなるまでの時間で、これを「盤石劫」といいます。落語にある「五劫の擦り切れ」はこれに由来しています。

一辺が二キロメートルの立方体の城の中に芥子の人が百年に一粒ずつこの芥子の実を取り出して、完全に城の中が空っぽになるまでの時間で、これを「芥子劫」といいます。

この世界にあるものをすべて粉にして、その粉を一粒ずつ世界の果てまで運んで行き、運び終えるまでの時間で、これを「塵点劫」といいます。

他にも経典によって様々な例えがされていますが、具体的な長さというよりは、とてつもない時間の長さを想像させるための例えです。これを一億回繰り返すと「億劫」となります。

ただ、この「億劫」が仏教でよく使われるかといえば、そうではなく「阿僧祇劫」という言葉の方がより一般的です。この「阿僧祇」という単位には諸説ありま

すが、十の五十六乗から六十四乗になります。更にこれを超える最大の単位として「不可説不可説転」があります。これは十の三七二一八三八八八一九七七六四四四四一三〇六五九七六八七八四九六四八一二八乗です。正しく「おつくう」になる数字です。

これ以外にも「未来永劫」という使い方をされる「永劫」があります。「永」は単位ではなく、ただ「ながい」という意味です。逆に短い時間を表す単位としては、眼を瞬く間とされている「刹那」があります。およそ七十五分の一秒です。月忌参りで読経しています『仏説阿弥陀経』に極樂浄土までの距離を西方へ「十万億仏土」と説かれています。これを計算した人によると十京光年の彼方だそうです。先人の想像力に脱帽するばかりです。

(浄)



『心の相談室』

毎月第四土曜日

午後三時～五時

東別院横

「いちよう館」二階

相談無料

日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等を、僧侶がお聞きします。

『姜尚中の政治学入門』 を読む(二)

―政教分離の

原則をめぐって―

小紙で姜氏の著作は何度か取り上げさせていた。今回は、姜氏の自らの専門である政治学についての入門書を紹介させていだきたい。本書は、第一章から第七章までからなっており、アメリカ、暴力、主権、・・・など、それぞれテーマが設けられている。今回は第四章「憲法」について読んでみたい。

安倍首相が、先日五月三日の憲法記念日に合わせて、憲法改正の意向を示したことは記憶に新しい。

目まぐるしく変化する国際情勢に合わせて、日本国憲法も柔軟に改正していかなければならないのでは。そう思われる御仁も多いことだろう。しかしちょっと待てよ、私たちはそもそも憲法というものの成り立ち

をどれだけ知っているのだろうか。単に出来事の表面だけを捉えて情緒的なものと言っているだけではないだろうか。そういう議論に危うさを感じているのは、私一人ではないだろう。

姜氏は現在の改憲議論において、戦争放棄(第九条)をめぐる議論と同時に、政教分離(第二十条)についての議論を深めることが重要であると指摘している。以下その骨子を簡単に紹介してみよう。

近代国家とは、そもそも国家権力の基礎を宗教や道徳といった内的価値とは切り離したところで成り立つたものである。そこには十七世紀から十八世紀にかけてヨーロッパにおける宗教戦争の、未曾有の惨禍に対する深い反省があった。そして、どのようにして公的なものと私的なものを切り離すかという問題意識の下、血の代償をはらって手に入れたのが、政教分離の原則である。その原則は、ヨー

ロッパにおいて、大規模な革命を経験したフランスにおいて現在も大切にされている。

そういう意味で、近代国家とは、個人に内的価値観を押し付けられない(つまり何を信じてよい)中性国家なのである。

改憲論者の中には、憲法の前文に国の伝統とか文化を大切にすると心や、愛国心などを書き込むべきだという意見がある。つまり憲法に実体的な価値観を盛り込むべきだとする意見である。私は愛国心を押し付けられることに窮屈さを感じる者の一人だが、この意見は、本来の憲法のあり方からしても、時代を逆行していると言えるのだろう。

さらに、氏は「祀る国は、戦争をする国だ」(子安宣邦)の言葉をヒントに、戦争放棄(第九条)と、政教分離(第二十条)はセットになっていることを指摘している。確かに、祭政一致型国家が、その実体的価値

を守るために、戦争への道を開いていくことは十分に考えられることである。これは我々宗教者が肝に銘じなければならぬことであろう。

氏はこの本を執筆した動機について、あとがきで述べている。私たちには、自分で直接見た経験したもの、確かかなものとして信じる傾向がある。しかしそれは往々にして私たちの判断を誤らせる。いわゆる「生の」だけを扱うメディア的な情報だけでは限界があるというのだ。たとえ鮮度は落ちていても「干物」の知というものが大切であるという氏の主張には説得力がある。



(彰)

杉谷浄の ラジオ案内

七月四日(火)
八月一日(火)
九月五日(火)
FM・N1(七十六・三MHz)で午後一時半から一時間放送します。
番組名は「生活一番シャトル便 住職のよもやま話」です。再放送は放送日の午後十一時と土曜日の朝七時から二回です。インターネットでも聞けます。

徳法寺の ホームページの ご案内

「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスは
<http://tokuhou-ji.com/>
です。是非覗いてみてください。

本の紹介

『君の臍臓を

たべたい』

住野よる 著

双葉文庫

内容が、異様なタイトルから連想されるものとはまるで違っていた。臍臓を患った女子高校生と、それを見守る男子高校生のはなしである。

ふとしたことから主人公の「僕」は、クラスメートの女子桜良（さくら）が余命僅かな身であることを知る。そのことをきっかけに二人の奇妙な関係が始まる。しかし、死が迫っていることを自覚しながらも、どういうわけか、彼女にはまるで悲壮感がない。そのあまりにもあつからかんとした態度に、彼はどうしても彼女に悲惨な運命が迫っていることを現実として受け入れられないでいる。

一方彼には、心を許す友人が一人もいない。周りとの

関係を一切断ち切った生き方をしてきた。彼が心を解放できるのは、唯一小説の物語の中の世界だけだった。

そんな自己完結型の心の扉を、桜良は半ば強引に開かせようとする。彼女は人並み外れて快活な、誰にでも好かれる女の子だった。二人は、お互いまるで正反対の世界に生きていることを意識し、ひかれあう。しかしそれは恋愛に発展するわけでもない。

そこには、私のようなおじさんにはちよつと想像できない、最近の若い男女の関係があるのだろう。しかし、もし二人が恋愛関係になったら、この小説はおそらく月並みなものとなっていただろう。この小説をあえて恋愛小説にしなかったところに、作者の強いメッセージが込められているように思えてならない。

人は、他者に必要とされ、他者が必要とする存在である。人が生きる意味もそこにあるのだ。そのことを作者は

言いたいに違いない。すべての縁（関係性）を断ち切れれば、一切は空である（つまり何もない）と、仏教では教えている。桜良と過ごすうちに、徐々に彼は変わっていく。人間は人間同士の関係性の中で寄り添いながら生きていくものなのだという事実、目を開いていくのである。

桜良は出会ったばかりのころ、彼に「君の臍臓をたべたい」とメールした。昔の人はある臓器を患うと、他の動物の同じ臓器を食すれば治ると信じていたというのだ。

しかし彼は桜良の死の直前に、まったく同じ言葉を彼女の携帯にメールするのだ。それは彼女は彼の一部であり、彼は彼女の一部であるということを伝える、渾身のメッセージだった。

生と死という重たい古典的テーマを、これほどまでに軽やかに描いてみせる、若い作家の感性和筆力に感心させられた。この作品は映画化され七月に公開される。

(彰)

各寺のご案内

◆常徳寺

金沢市寺町

五丁目一番二九号

TEL 二四一―二六四九

◎秋彼岸

九月二十三日(祝)

午後二時より

◎報恩講

十月十日(火)

お建夜 午前十時

お日中 午後一時半

法話 佐々木 五六師

◆徳法寺

金沢市野町

二丁目三二―四

TEL 二四一―五二一九

◎お講(石坂同信会主催)

毎月二十一日

午後七時半より

講師 七月 杉谷 浄

八月 西山 彰

九月 杉谷 浄

十月 藤塚 曼

◎秋彼岸

デイズ・ジャパン写真展

九月二十日(水)～

二十六日(火)

◎秋彼岸中日及び

永代経法要

九月二十三日(祝)

午後二時より

講師 藤原 正寿師

編集委員

西山 彰(常徳寺)
杉谷 浄(徳法寺)

